奈良時代（8世紀前半・後半）

8世紀前半には、遺跡の中央部で34棟の竪穴建物が検出されており、7世紀代に比して飛躍的に建物戸数が増加しています。とくに北半部の竪穴建物群は、等高線の緩やかな平坦地に営まれており、海獣葡萄鏡・素文鏡・銅鈴・皇朝銭をはじめとする多数の祭祀遺物が出土しています（図2-14、15）。これらの遺物は、竪穴建物の覆土もしくは床面上から出土しており、これらの祭祀具の使用に関わる集団の居住が想定されます。南半部の竪穴建物群は、地形的な稜線上の高まりに営まれています。以上の竪穴建物群は、その主軸方位が統一されていることから、計画的な集落形成が行われたと考えられます。したがって、7世紀代の集落形成とは異なる意図や計画のもと、祭祀に専業的に従事する集団とその集落が成立したと考えられます。

南半部の竪穴建物の1棟から、和同開珎とともにガラス容器片が出土し、その周辺からガラス坩堝片3点が出土しています。このほか、北部の竪穴建物からもガラス坩堝片が2点出土しています。この資料は、この時期にガラス工房が存在したことを示すとともに、中央の都城関係遺跡以外の地方での出土事例として重要な発見となっています。ガラス生産は、飛鳥池工房遺跡にもみるように、宮殿、都城に深く関わる官営工房のひとつとして管理されていました。寺家遺跡においても都の官営工房からガラス製作の工人が技術とともに招かれ、ガラス工房が存在したと考えられます。したがって、その集落形成には、中央とのつながりによる、国家的な関与があったと想定され、官人の存在を示す帯金具の出土からも、公的な参画があったことがうかがわれます。

8世紀後半には、これらの竪穴建物群が、掘立柱建物に建て替えられます。これらは前述の竪穴建物群と同じ主軸方位を踏襲しており、建物規模も同様であることから、祭祀専業的集落としての性格を継承した建物群と考えられます。

遺跡北部の第1次・第16次調査では、馬蹄状の窪地地形の内部で、8世紀後半の大型焼土遺構が検出されています（図2-14、15）。この遺構は、明赤色に焼き締まる粘土面として検出されました。粘土は、砂丘地においては外部由来のものであり、粘土を持ち込み、燃焼のための場を人為的に設けたものと考えられます。部分的な検出面だけでも2ｍ×2ｍの規模をもち、未検出部分にも大きく拡がる極めて大規模な焼土遺構です。この粘土面は、2面以上が重なることから、複数回にわたる燃焼と粘土面の設置行為が想定されます。さらに、この粘土面には、炭化物や灰がほとんど残されておらず、隣接する土坑群には、炭化物や灰が充填されていることから、その廃棄土坑群と考えられ、燃焼行為後の清掃行為が確実視されます。さらに、この粘土面は、粘土ブロックを混和した粘質砂質土により被覆されており、この後には、新たな燃焼行為が認められないことから、「粘土面の設置→燃焼行為→清掃行為→（複数回のくりかえし）→粘質砂質土による被覆」の過程を一連の行為とみなすことができます。加えて、この焼土遺構に隣接して、人頭大の礫を方形に組み合わせた石組炉も検出されています（図2-15）。炉の内部には、支脚が据えられ、周囲に土師器甕の出土があることから、神饌等の調理が行われた可能性があります。

以上に述べた、砂丘地形の窪地の内部という空間的特殊性、燃焼行為のための場の人為的設置、燃焼行為後の清掃行為とその後の被覆行為、石組炉での調理の要素から、この遺構は大規模な燃焼行為を伴う祭祀遺構であり、祭祀を行うための空間（祭祀場）が形成されたと考えられます。

以上から、8世紀の寺家遺跡には、国家的な関与のもと、祭祀専業的集落と祭祀場が成立したと考えられます。一方、寺家遺跡に対面するシャコデ廃寺では、8世紀初頭には伽藍を伴う古代寺院が整備されており、砂丘地と丘陵地で、神祇祭祀と仏教祭祀が併存する宗教的な環境が成立したと考えられます。

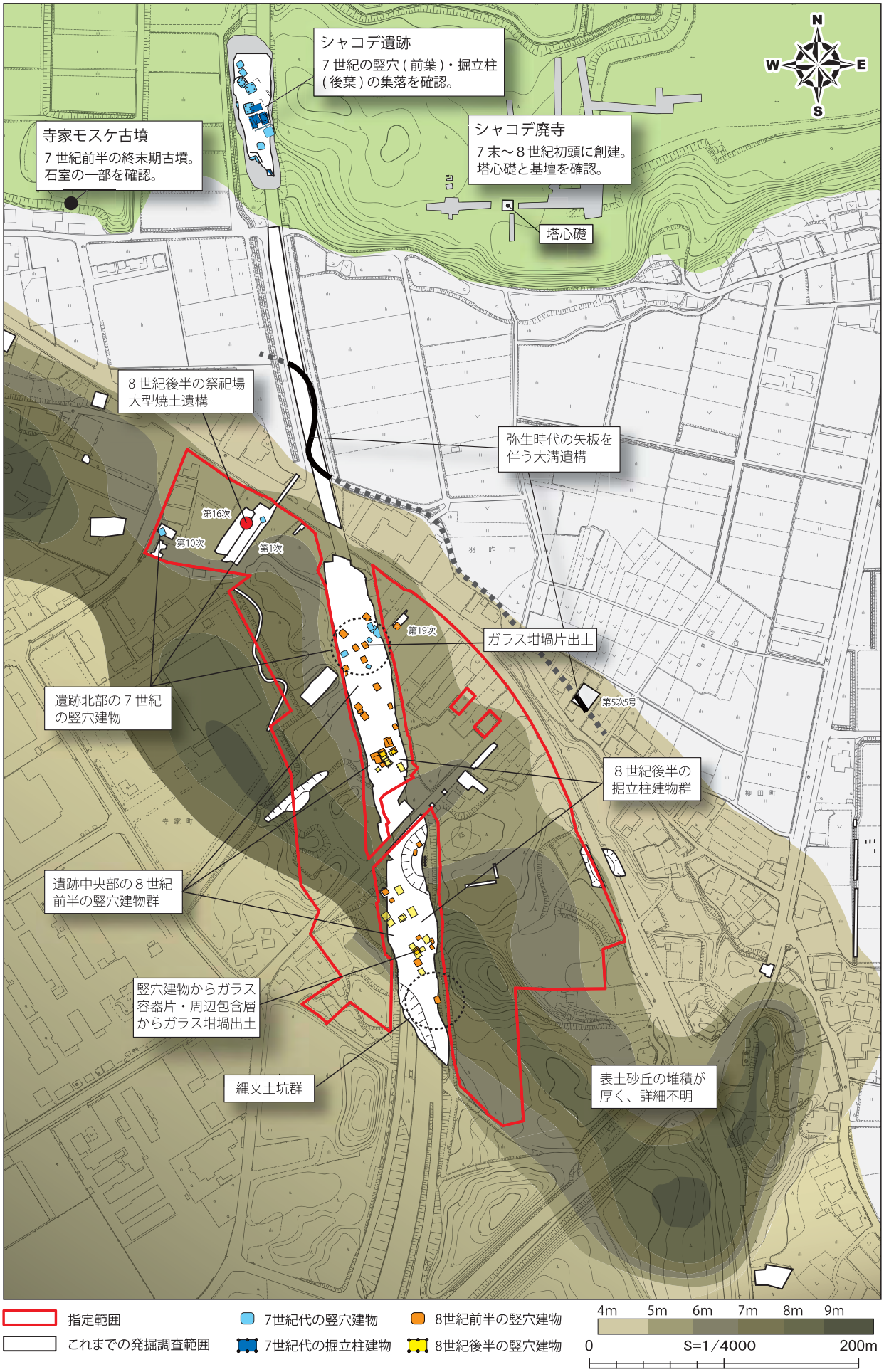
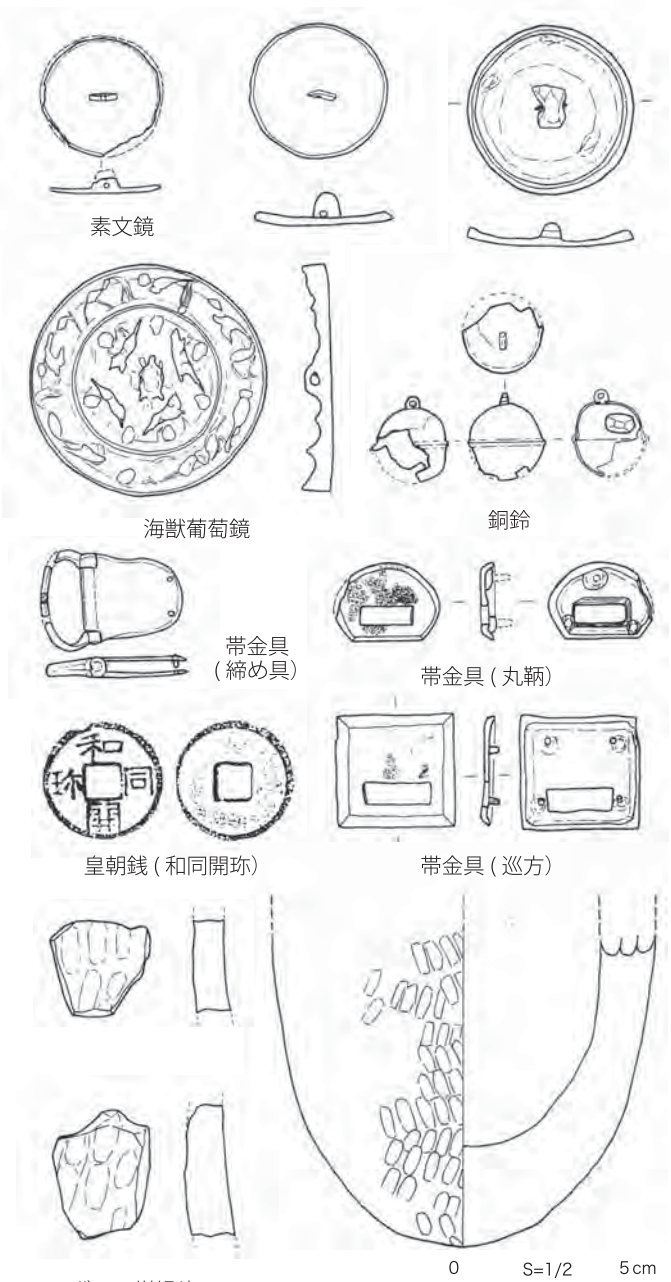


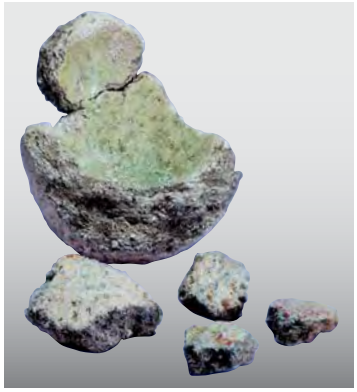
図2-14　史跡周辺の8世紀までの主要な調査成果



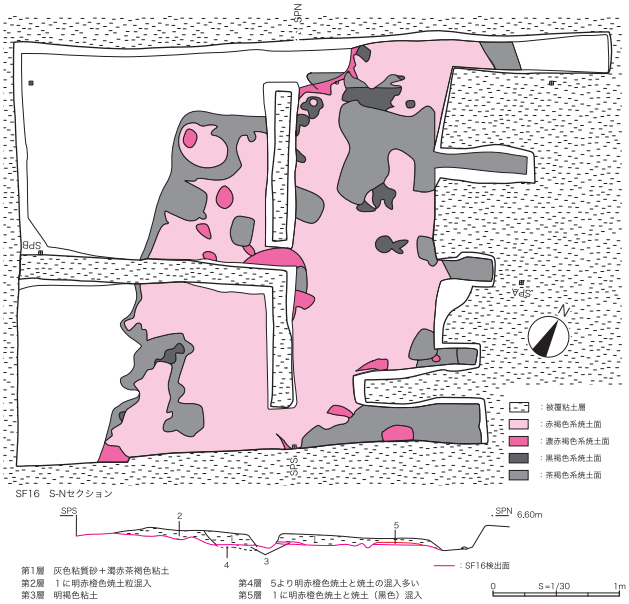
竪穴建物　検出状況 ※

竪穴建物出土の主な祭祀遺物 ※

ガラス容器片 ※



ガラス坩堝片 ※



石組炉 ※

大型焼土遺構（SF16）検出状況

図2-15　８世紀代の主な遺構と遺物

※は石川県埋蔵文化財センター所蔵資料